

経済地理学の方法に関する一考察

—D. マッシー理論の意義と限界—

豊田昌秀

はじめに

1960年代後半、英語圏において、ラディカル地理学¹⁾が台頭した。その背景には、ヴェトナム戦争をはじめとする植民地・従属国の武装闘争とアメリカ合衆国における公民権運動などの都市の社会運動の噴出という帝国主義の二つの危機があった。伝統的地理学（計量地理学）はこの重要な問題に信念をもってこたえられなかった。初期にはバンギを代表とするデトロイトの探検グループ²⁾にみられるように、伝統的地理学の方法を応用したものであったが、伝統的地理学の理論と方法が社会的有効性を持たないことが明らかになり、オルタナティブを求める運動が始まった。その代表例がハーヴェイである。その後、多くの地理学者がハーヴェイにならい、ピート編『ラディカル地理学』（1977年）³⁾の発刊にみられるラディカル地理学の繁栄がみられた。1973年のマッシーによる伝統的地理学への批判（＝新古典派産業立地論批判）⁴⁾はその一例である。しかし1980年代にはいると、ラディカル地理学の戦闘性が失われていった。その原因としては、①マルクス主義の本流が批判にさらされたこと、②1979—83年不況の経験と現存社会主義についての知識が広まったこと、③1970年代のアカデミックなスタイルがプロフェッショナルリズムでおきかえられたこと、④ラディカルの中に体制化するものがあらわれたことがあげられる⁵⁾。しかしラディカル地理学の流れは現在も脈づいている。その例がハーヴェイ『資本の限界』（1982年）⁶⁾とマッシー『空間的分業』（1984年）⁷⁾の公刊である。

ラディカル地理学の一派である構造主義的マルクス主義経済地理学はマッシーによる新古典派産業立地論批判として出発し、短い全盛期を経てローカリティ研究にいたった。本稿の課題は、現在、経済地理学界において重大な地位を占めているマッシー⁸⁾を中心とするこの構造主義的マルクス主義経済地理学を検討し、三点にわたってその評価すべき点と問題点を明らかにすることである。つまり、一方でわれわれはマッシーによる新古典派産業立地論批判を高く評価するが、他方で、まず構造主義的アプローチ (structural approach)⁹⁾の静態的性格を明らかにし、しかるのちに構造主義的アプローチとローカリティ論の不整合性を明らかにする。

ピートとスリフトによれば、彼らのいう「政治経済学的アプローチ」(注5, p. 14)の歴史、すなわちラディカル地理学プラス人文主義地理学¹⁰⁾の歴史は次の三期にわけられる。

① 1970年代～1980年代初頭

構造主義の影響圧倒的

② 1970年代後半～1980年代中葉

関心の多様化：特に社会構造と人間主体の相対的効力、實在論、ローカリティ研究

③ 1980年代後半～

ポストモダニズムとその批判

このうち本稿で扱う対象は①期と②期である。

1) ただし、ラディカル地理学はマルクス主義に限定されず、広範なラディカル＝急進派の意味である。(竹内啓一「ラディカル地理学運動と『ラディカル地理学』」『人文地理』Vol. 32, No. 5, 1980年, pp. 44-67 参照。)

2) Bunge, W., *Fitzgerald: Geography of a Revolution*, Schenkman Publishing Company Inc., 1971.

3) Peet, R. (ed.), *Radical Geography: Alternative Viewpoints on Contemporary Social Issues*, Maaroufa Press, 1977.

4) Massey, D. "Towards a critique of industrial location theory",

Antipode, Vol. 5, No. 3, 1973, pp. 33-39.

- 5) Peet, R. & Thrift, N. "Political economy and human geography", Peet, R. & Thrift, N. ed., *New Models in Geography* Vol. 1, Unwin, 1989. p. 7.
- 6) Harvey, D., *The Limits to Capital*, Basil Blackwell, 1982. デイヴィッド・ハーヴェイ, 松石勝彦・水岡不二雄ほか訳『空間編成の経済理論——資本の限界』上・下, 大明堂, 1989-1990年.
- 7) Massey, D., *Spatial Divisions of Labour: Social Structures and the Geography of Production*, Methuen, 1984
- 8) マッシーを扱った日本語文献としては次のものがある。
松岡俊二「地域経済研究への企業論的アプローチについて」『財政学研究』No. 10, 1985年, pp. 46-59. 水岡不二雄「アメリカのマルクス経済地理学の新しいフロンティア——現代アメリカの都市・地域問題——」, 種瀬茂編『現代資本主義論』青木書店, 1986年, pp. 336-358. 松橋公治「地域構造論と構造アプローチ」, 矢田俊文編『地域構造の理論』ミネルヴァ書房, 1990年, pp. 41-51.
- 9) 訳語は松岡氏(注8, p. 52)による。松橋氏(注8, p. 41)は構造アプローチという訳語をあてている。
- 10) 山野正彦「空間構造の人文主義的解読法——今日の人文地理学の視角」『人文地理』Vol. 31, No. 1, 1979年, pp. 46-68 参照。

第1節 構造主義的アプローチの出発点——

D. マッシーによる新古典派産業立地論批判

本節では構造主義的アプローチの出発点となったマッシーによる新古典派産業立地論批判をとりあげる。新古典派批判自体、構造主義的アプローチではないが、構造主義的アプローチが成立した背景を明らかにするため、まず第1節でとりあげる。

まずマッシーが研究を始めた当初の学問状況をみる¹⁾。1960年代以後、社会科学における実証主義と計量革命の影響をうけて、空間パターンの理論的説明は産業立地論が主流であった。実証主義は法則の経験的な検証可能性を前提とする。これは人文地理学では空間分析の形をとり、新古典派産業立地論の初期の業績、たとえば、A. ウェーバー²⁾やレッシュ³⁾への回帰がみられ

ることになった。「新古典派経済学は1960年代に地域理論を含めてほとんどすべての経済学を席捲した」(注1, p. 203)とラヴァリングはいう。したがって空間構造は市場の一般理論の応用として説明された。この理論は均衡モデルに依拠した静的理論であり、規模の経済と距離に関係した輸送費をつくくわえることで生産の地理学を完成させようと主張した。これは、輸送費と労働費を基軸に「工業立地指向の最初の基本網(Grundnetz)」(注2, p. 19)をつくり、しかるのちに集積の問題(=規模の経済)を考えたA. ウェーバーの考え方と関係する。A. ウェーバーは、「輸送費要因は工業の輸送費による最適の立地を定める。労働費要因はこの基本網に対して、生産の一部を労働地に牽きつける『偏倚』をひき起こし、集積要因は生産の一部を集積地点に集中させることによって第2の『偏倚』をひき起こす。」(同上, p. 34)という。新古典派産業立地論の要点は市場が空間的等質性に向かう傾向があるととくところにある。ここにおける典型的方法は輸送費・生産性などの事実から空間パターンを予測する形式論理学的モデルを発展させることであった。

構造主義的アプローチは、新古典派産業立地論への批判として始まった。構造主義的マルクス主義経済地理学の代表者とされるD. マッシーは産業立地論の流派を、(1) たった一つの企業の立地決定を扱うA. ウェーバー、(2) 相互依存する少数の企業の立地決定を扱うホテルリング⁴⁾、(3) 行動主義心理学に基づく行動主義⁵⁾、(4) 全体の経済景観を扱い空間的観点から経済学の一般均衡の概念に匹敵するものを見出だそうとするレッシュ、の四つに分類する。これについてのマッシーの「認識論的批判」⁶⁾は立地論の新古典派経済学モデルの不当性に向けられている。マッシーはいう。

「産業立地論がこれまで内在していた認識論の最も基本的な特徴の一つは個別企業とその立地行動の抽象的なモデルを構築するところから出発する必要である。このことは現在、産業立地論が抱える多くの問題の根っこになっている。しかし、批判は、理論的注意の中心が説明さるべき対象としての個別企業にあることでも、個別企業の顕著な特徴についてなされてきたさまざまな仮定の特定の内容に理論的注意の中心が向けられていることでもない。

問題は説明のレベルを個別企業の段階に限定してきた基本的方法論である。/ここで議論するすべての産業立地論の基礎となっているものは…個別企業の非現実的・抽象的モデルであり、このモデルは多く批判が集中している新古典派の抽象的モデルをもとにつくられている。」(注6, pp. 58-59)

つまり、マッシーによれば、新古典派産業立地論モデルの問題点は、議論を個別企業の段階に限定してきた点である。これは A. ウェーバー、レッシュの古典的産業立地論に典型的だが、最近の理論的分派である行動主義にも妥当するとマッシーはいう。マッシーによれば、新古典派の抽象的モデルは、「実在の異質な現象から共通なファクターを抽出して作られ…実在の企業が細部において特徴と行動を異にするため、実在の企業を正しく表現していない」(同上, p. 59) のであり、「理論からの個別的現象の逸脱⁷⁾を扱い、理論を経験的実在に適用する方法について、そこで問題が生じる」(同上, p. 59) というのである。これは、一言でいえば、新古典派産業立地論モデルに理論と実在の分裂がみられるということである。

この方法論が誤っている理由として、マッシーは次の三点をあげている。すべて理論と実在の分裂についてのものである。

第一に、「実在の企業の行動が本質的核(抽象的モデル)と本質的行動からの逸脱(個々の事例)の二つに分けられるため、理論と実在の関係において、それは認識論的に矛盾している。それが適用される実在との関係において、モデルはアプリアリに与えられ、追加的要因(additional factors)は単純な記述によって得られる。」(同上, p. 60) マッシーによれば、モデルは実在と無関係に与えられ、実在は追加的要因としてアドホックに密輸入される。

第二に、「説明さるべき実在の現象の構造的抽象からモデルが構成されておらず、むしろモデルが現象のいくつかに共通な特性のよせあつめであるために、産業立地論は特定の状況において作用しているメカニズムの小さい部分しか説明できない。この点は、いくつかのメカニズムを『追加的要因』の領域に属させて、現象の実在的構造と現象のダイナミクスをみえなくする。」(同上, p. 60) 例として、マッシーは産業立地論の理論家の生産者と消

費者についての議論をあげている。つまり、生産者と消費者は歴史的定在であり、モデルのなかで現実に形象化されねばならないのは生産と消費との特殊資本主義的形態の記述であるにもかかわらず、新古典派はこれを非歴史的に扱っているとマッシーはいうのである。マッシーは、理論と実在の分裂を解決するために、構造を明らかにしなければならないという。

第三に、「行動が方法論的に二つに分けられるだけでなく何も説明されていない、『核』（あるいは非現実）は抽象的先験的モデルとして与えられる。行動の他の特性は『追加的要因』であり、特殊経験事例で必要とされる場合にのみ引き合いに出されるため説明不能である。」(同上, p. 60)

次にマッシーは、新古典派立地論の超歴史的外観と企業の本質が現在の経済体制内にあることとの間に矛盾が存在することを指摘する。「この矛盾は立地理論（新古典派経済学）の特定の抽象が正確でないために生ずるものでなく、人間行動の非歴史的形式的モデルの概念がすべて誤解であるために生ずるものである。行動形態はそれ自身作られるもので与えられるものではない。それは、特定の歴史的状況とある時代の全体システム内での位置から生み出される。」(同上, pp. 60-61)

マッシーは、以上の批判の上になら、「歴史的・個別的バリエーションが除去された抽象的行動モデルに向かって努力するかわりに、現実の歴史的コンテキストの中で行動を分析すべきだ」(同上, p. 61)と主張する。「そのようにしてのみ行動はすべての多様な形態において説明される。ここで議論している経済人の概念と企業の理論とは、分析の出発点为非歴史的自己構成の主体であるため、このことを行いえない。時間・空間から類似のいくつかの典型的核を抽象するのではなく、時間・空間内における現実の状況の構造を規定する方向にアプローチがなされねばならない」(同上, p. 61)というのである。つまりマッシーによれば、行動は抽象的でなく、歴史的に分析しなくてはならない。そのためには、構造をとらえなくてはならないというのである。

マッシーによれば、新古典派に代わるべきアプローチは明らかである。つ

まり、「構造主義的アプローチが必要とされる」(同上, p. 70)とマッシーはいう。なぜなら、行動は仮定されるのではなく、説明されねばならず、行動は現象の表面をさまようのでは説明されず、歴史的変化がマイクロレベルでもマクロレベルでも理解されねばならないからである。「このためには立地行動の性質とその行動がつくられる構造的コンテクストとの間の理論化された(原文イタリック)関係が必要になる」(同上, p. 70)とマッシーはいう。

以上がマッシーによる新古典派産業立地論批判である。新古典派産業立地論の四分類が妥当かどうかは別として、マッシーが新古典派産業立地論モデルを非現実的・抽象的であるとする点は正しい。しかし批判の代案として提出されたものが問題であった。次節ではまず構造主義的アプローチの静態的性格について検討する。

- 1) Lovering, J. "The restructuring debate", Peet, R. & Thrift, N. ed., *New Models in Geography*, Vol. 1, Unwin, 1989, pp. 203-205.
- 2) Weber, A., *Über den Standort der Industrien: Erster Teil, Reine Theorie des Standorts*, Verlag von J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1922. アルフレッド・ウェーバー, 篠原泰三訳『工業立地論』大明堂, 1986年.
- 3) Lösch, A., *Die Räumliche Ordnung der Wirtschaft*, Gustav Fischer Verlag, 1962. アウグスト・レッシュ, 篠原泰三訳『経済立地論』大明堂, 1968年.
- 4) Hotelling, H., "Stability in competition", *The Economic Journal*, Vol. 39, 1929, pp. 41-57.
- 5) Cox, K. R. & Gollidge, R. G. (ed.), *Behavioural Problems in Geography Revisited*, Methuen, 1981. ウィン・コックス&レジナルド・ゴレッジ, 寺阪昭信監訳『空間と行動論』地人書房, 1986年.
- 6) Massey, D. "A critical evaluation of industrial-location theory", Hamilton, F. E. I. et. al. ed., *Spatial Analysis, Industry and the Industrial Environment, Progress in Research and Applications*, Vol. 1, *Industrial Systems*, 1979, p. 58.
- 7) 1973年の論文ではマッシーは1979年の論文と全く同じ立場で議論をすすめているが、理論からの個別的現象の逸脱についての記述はない。

第2節 構造主義的アプローチの静態的性格

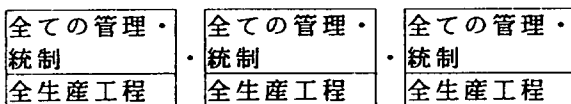
前節ではマッシーによる新古典派産業立地論批判をみた。マッシーによる新古典派産業立地論批判をわれわれは高く評価する。しかし、批判の代案として提出されたものが問題であった。批判の具体的な代案は『空間的分業』で提供された。本節ではまず、『空間的分業』を例にとって、構造主義的アプローチの静態的性格を明らかにする。

現在のマルクス主義経済地理学はマルクスだけではなくルイ・アルチュセールをはじめとする構造主義者に大きな影響をうけている。構造主義とは、まず今世紀の言語学(ソシュール)¹⁾で用いられ、ついで人類学(レヴィ・ストロース)²⁾で用いられた言葉である。ソシュールは通時言語学、共時言語学を区別し、前者に対する後者の優位を説いた。そしてアルチュセール本人は、「われわれのテキストの奥に根づく方向性は…『構造主義的』イデオロギーに属してはいないと思う³⁾」と否定しているが、構造主義的マルクス主義の代表者とされるのがアルチュセールである。アルチュセールは、初期マルクスと後期マルクスの思想の間に「認識論的切断」を認め、グラムシをはじめとする「マルクス主義の歴史主義的解釈」(注3, p.200)を批判した。また、アルチュセールによれば、社会構成体は別々のしかし相互に関連した審級から構成された社会的な全体である。社会構成体は経済構造(生産力と生産関係)と政治的—法律のおよび文化的—イデオロギーの上部構造からなる。一方に生産様式による最終審級における決定、他方に上部構造的審級の相対的自律性をもつ「鎖の両端⁴⁾」を結びつけるためにアルチュセールは重層的決定という概念を考えた。つまり、アルチュセールによれば、「『矛盾』は、矛盾がその中で作用する社会全体の構造から切り離すことができず、また存在の形態的な諸条件、およびそれが支配する諸次元からも切り離すことができない。したがって矛盾それ自体は、その核心においては、それらによって影響され、同じ一つの運動のなかで、決定するものであると同時に決定されるものであり、それが活動力をあたえる社会のさまざまなレベルとさまざま

な次元によって決定されるものである。」(注4, p. 137)これを, アルチュセールは, 「矛盾は, 原理的に言って重層的に決定される」(同上, p. 137)というのである。ただし, アルチュセールにはいくつかの批判がある。例えば上野俊樹氏は次のようにいう。「アルチュセールにおいてイデオロギー的な否認の見地が弱いのは, やはり構造主義の影響であろう。なぜなら, 一般に, 構造主義は事物の外的な相互依存のみをみて, 相互依存するそれぞれの事物の内部, その実体をみないからである。構造主義においては, 事物の内的な法則をなす矛盾とこの矛盾による事物の他のものへの転化, 発展を把握する見地がない。」⁵⁾上野氏はアルチュセール主義の反弁証法的・形而上学的性格, つまり静態的性格について指摘している。このようなアルチュセール主義の問題点, つまりアルチュセール主義の静態的性格は次の点にもっともよくあらわれていると私は考える。「時間の等質的連続性と同時性というヘーゲルの歴史的時間の本質的な二つの特質」(注3, p. 142)について述べた部分で, アルチュセールは次のように述べる。アルチュセールは「社会的全体性の種別構造」(同上, p. 143)を前提とする。そこでは, 「歴史的存在の構造は, 全体のすべての要素がつねに同一の時間のなかに, 同じ現在のなかに共存しており, したがって, 同じ現在のなかでたがいに同時的である」(同上, pp. 142-143)。これは, 「本質的切断」(同上, p. 143), つまり「現在を切断して, その切断によって明らかにされる全体のすべての要素を, それぞれの内的本質を直接表現する直接的な関係のもとに置く切断」(同上, p. 143)を可能にする。アルチュセールは, この社会的全体性の種別構造を前提として, 「歴史科学の全問題は, ひとつの弁証法的全体から別の弁証法的全体への継起に対応するひとつの時期区分によってこの連続を切り取ることにある」(同上, p. 142)という。つまり, アルチュセールは, それぞれの時代が固有の型と完結性をもつとして, 時代と時代の間を切り, 歴史科学の全課題が時代区分であるというのである。そして経済地理学の分野で多くの論者によって構造主義的マルクス主義の代表者とされるのがマッシーである。本稿では, 「アルチュセール流のマルクス主義理解にそって立地論の抽象性を批判した」

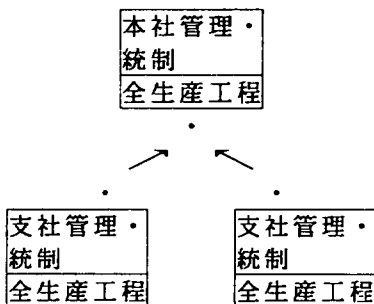
図1 三つの異なった空間構造を示す三つの立地

1. 立地的に集中した空間構造



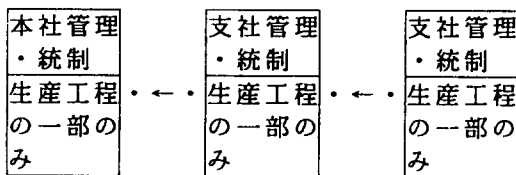
(企業内ヒエラルキーはない)

2. クローニング分工場型空間構造



(所有・占有関係のヒエラルキーのみ)

3. 部分工程型空間構造



(所有・占有関係と技術的分業において場所による工場の分離・結合がおこなわれる)

出所：はじめに，注7，p.77

(はじめに, 注8, 水岡, p.339) マッシーを扱う。ピートとスリフトによれば、「英語圏のマルクス主義地理学はアルチュセールの影響を間接的にしかうけなかった。『構造』および『構造主義』のより広義でより不安定な概念が用いられた。1980年代初頭にはこの概念はさらに広義化した。この変化の一つのしるしがドリー・マッシーの業績である。」(はじめに, 注5, p.14)

マッシーは『空間的分業』で立地における三種の空間構造の図式をあげている(図1)。1. が立地的に集中した空間構造 (locationally-concentrated spatial structure), 2. がクローニング分工場型空間構造 (cloning branch-plant spatial structure), 3. が部分工程型空間構造 (part-process spatial structure) である。マッシーの叙述の順序にしたがえば, 第1にマッシーは3. の部分工程型空間構造をとりあげる。この空間構造はエレクトロニクス産業に典型的な空間構造である。そこでは「R & Dおよび戦略的機能が本社立地点でおこなわれる。また, その他多くの工場(簡単のため二つとする)があり, それぞれが異なった地域にある。一方は複雑な部品をつくる分工場であり, 他方は最終組み立てがおこなわれる場所にある。」(はじめに, 注7, p.70) マッシーによれば, この空間構造のヒエラルキーは一つのヒエラルキーではなく, 諸ヒエラルキーの合成物である。マッシーはこれを便宜的に二つのグループにわけた。マッシーによれば, 「最初のヒエラルキーは本社・分工場としてのその地位によって異なった工場(したがって異なった立地点)を結びつけるものである。これはいわゆる経営的ヒエラルキーであり, それにしたがって財務的・管理的統制が伝わる。」(同上, pp.70-71) また, 「工場間関係のこの面が表すものは経済的所有関係と占有関係の特定の空間組織形態である」(同上, p.71)。そしてこのヒエラルキーは, 物的生産手段に対する個々の労働者の統制と脱熟練化とのさまざまな程度をあらわしている。これは本社・分工場の命令伝達システムのヒエラルキーである。もうひとつの空間構造のヒエラルキーは「生産工程それ自身の中にあるもの」(同上, p.71) である。「R & Dは技術的に複雑な部品の生産から分離され, 後者はさらに商品の最終組み立てから分離される。この空間構造の中で生産の各段階

は別々に立地し、同じ企業の統制の下におかれる。」(同上, p. 71)

第二に、マッシーは2. のクローニング分工場型空間構造をとりあげている。そこでは「本社・分工場型空間構造はあるが、全生産工程が各地点でおこなわれる。工場間の唯一の相違は一方が本社で他方が分工場であるということである。ここには一つのヒエラルキー、つまり広い意味の『経営機能』のそれしかない。」(同上, p. 74) 2. の例としてマッシーは中規模の被服産業企業、市場近くで生産する必要のある最終消費財を生産する多工場型企业、コカコーラ・ボトリングの工場をあげている。「クローニング」ということの意味は多くの同じような工場がさまざまな地域に複製されるということである。

最後に1. の立地的に集中した空間構造では、「商品生産の全工程は単一の地理的地域内に集中する。どのような経営的ヒエラルキーが存在しても、また生産工程内にどのような分業が存在しても、すべて一地域内に立地する。この空間的分業は地理的だけでなく雇用・財政的にも小企業に明らかに最も典型的である。」(同上, p. 75)

N. スミスはこれについて次のようにマッシーを批判する。マッシーは、空間的分業のストラクチュアリング・リストラクチュアリングの理由として、①産業組織と企業戦略、②特定の場所の以前から存在する性格を重視するが、前者について「三部からなる多工場型企业空間構造類型学 (typology of multiplant corporate spatial structure) を提示している」⁶⁾。第一に『立地的に集中した』組織形態、第二に『クローニング分工場型』空間構造、第三に『部分工程型』構造である。そして、「この類型学の要点は異なった組織構造が異なった労働の属性を捜し求め、作り出し、それによって高度に分化した空間的分業を作りあげることに貢献することである」(注6, p. 154) と N. スミスはいう。N. スミスによれば、新しい立地論をめざす初期の試みは理論と経験的分析の結合をめざした。しかし「ローカリティ研究における経験論の危険、そして経験的プロジェクトに広がる折衷主義は、理論的アプローチと経験的アプローチの二元論が解決されるというよりも再び肯定されてい

ることを暗示する」(同上, p. 156)。マッシーの研究は、理論ではなく、「経験的類型学」(同上, p. 156)を提供しているとN. スミスはいう。マッシーは地球規模の地理的变化の理論的ヴィジョンを複雑なリストラクチャリングと結びつけることに失敗した。そして、マッシーは「一般的フレームワークを深めたり理論化することは、それ自体どの特定の時点・地点で生起している事象についての解答も提供することができない」(はじめに, 注7, p. 9)というが、この考え方は「理論の放棄・新たな経験論の承認」(注5, p. 156)であるとN. スミスはいう。N. スミスによれば、理論は経験的折衷主義において「失われた構成要素」(同上, p. 156)である。N. スミスによれば、経験的折衷主義において「最も尊ばれる研究は第一になかなく個別産業・部門・企業の事例研究である」(同上, p. 156)り、「この異なった経験間のリンケージは二次的重要性しかもたされていない」(同上, p. 156)。N. スミスによれば、まったく不必要ですでにすたれてもきていることは経験的なものの復活が理論の忘却によってなされた事実である。

N. スミスの批判はマッシー批判としては支配的なものである。多くのマッシー批判は、構造主義的マルクス主義経済地理学が類型学を提供し、理論の放棄・新たな経験論の承認であるとする。ここでいう構造主義的マルクス主義経済地理学は、実質的に『空間的分業』でさし示された理論をさす。そうすると構造主義的マルクス主義経済地理学は構造主義的アプローチにローカリティ論をつけくわえたものである。構造主義的アプローチは類型学である。しかし、類型学は、確かに完全な法則ではないが、理論の放棄・新たな経験論の承認ではない。われわれは構造主義的アプローチを類型学=静態的と批判し、しかるのちに構造主義的アプローチとローカリティ論との不整合性を明らかにする。

構造主義的アプローチの静態的性格は、構造主義の静態的性格(したがって類型学を生む)に由来すると思われる。つまり、構造主義の静態的性格が類型学を生んだのである。構造主義的アプローチは類型学であり、静態的である⁷⁾。そしてこの静態的性格は構造主義の静態的性格による。N. スミスは

構造主義的アプローチが理論の放棄・新たな経験論の承認であるという点を強調するが、われわれは構造主義的アプローチを静態的であるとして批判し、しかるのちに構造主義的アプローチとローカリティ論の不整合性をとくのである。以上、本節では構造主義的アプローチが静態的であることを述べた。次節では構造主義的アプローチとローカリティ論の不整合性を検討する。

- 1) Saussure, F. d., *Cours de Linguistique Generale*, Publié par Charles Bally et Albert Sechehaye, 1949. フェルディナン・ド・ソシュール, 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店, 1972年。
- 2) Levi-Strauss, *Tristes Tropiques*, Librairie plon, 1955. レヴィ・ストロース, 室淳介訳『悲しき南回帰線』上・下, 講談社文庫, 1971年。
- 3) Althusser, L. & Balibar, E., *Lire le Capital*, Librairie François Maspero, 1968. ルイ・アルチュセール&エチエンヌ・バリバル, 権寧・神戸仁彦訳『資本論を読む』合同出版, 1974年, p. 4.
- 4) Althusser, L., *pour Marx*, Tome I, François Maspero, 1965. ルイ・アルチュセール, 河野健二・田村叔訳『甦るマルクス』I, 人文書院, 1968年, p. 15.
- 5) 上野俊樹『アルチュセールとプーランツァス』新日本出版社, 1991年, p. 143.
- 6) Smith, N. “Uneven development and location theory: toward a synthesis”, Peet, R. and Thrift, N., ed., *New Models in Geography*, Vol. 1, Unwin, 1989, p. 154.
- 7) 後に触れる「投資ラウンド論」でマッシーはダイナミズムを導入しようとしているようであるが、マッシー自身、次のように自己批判している。「急激な変革の時期が確かにあるにしても、実際、もちろん、変化の過程はより多様で漸次的である。さらにある歴史的瞬間には異なる産業部門に多くの空間的分業が存在することがある。」(Massey, D. “In what sense a regional problem?”, *Regional Studies*, 1979, Vol. 13, p. 235.)

第3節 構造主義的アプローチとローカリティ論の不整合性

本節では構造主義的アプローチとローカリティ論の不整合性を検討する。

『空間的分業』にすでに副次的なものとしてローカリティ論の要素はあった。しかし、マッシー&アレン編『地理は重要である!』(1985年)¹⁾以後、構造主義的アプローチに対してローカリティ論が副次的なものであるという理論構造はそのままであるが、マッシーはローカリティ論に特化した。そして、マッシーはローカリティ論にもとづくローカリティ研究ばかりをおこなうようになったのである。

『空間的分業』の3章4節「場所のユニークネス」の冒頭でマッシーは次のようにいう。

「どの二つの場所も同じではない。…この違いは重要である。多くの人々は自らの生活をいまだに局地的におこなっている。彼らの意識は異なった地理的場所のなかで形成される。ある任意の時間に異なった地域が全く異なった仕方に変化することがありうる。異なった闘争が闘われ、異なった問題に直面する。」(はじめに、注7, p.117) この多様性を分析するにはどうしたらよいか。マッシーは次のように答える。「空間的に分化した生産のパターンは社会構造と階級関係における地理的変度の基礎の一つである。これが唯一の原因ではないが、重要である。」(同上, p.117) しかし、もちろん問題はこれほど簡単ではない。「たとえば、唯一つの経済構造形態の特徴をおびる局地地域(local area)はまれである。それは長く多様な歴史の結果である。異なった経済活動と社会組織形態が移り変わり、自らの支配を確立し、なかなかすたれず、のちに死滅する。」(同上, p.117)

これをより分析的にいうと次のようになる。「局地経済(local economy)の構造は『諸層』の結合の産物、つまり幾年月にもわたる新たな投資ラウンド(round of investment)²⁾、活動の新しい形態の連続的な重なるの産物とみなすことができる。

これらの局地的活動の新しい形態はそれぞれより広い背景と関係する。異なった種類の空間構造は歴史的に(きわめて図式的に)それぞれが以前の空間構造の上に重ねられたもの、あるいはそれと結合されたものとみなすことができる。これらの空間構造のそれぞれにおいて個々の局地地域における経

経済活動は特別な役割を果たし、他の諸地域の経済活動と支配・従属関係を切り結ぶ。それぞれの空間構造はあらゆる局地地域の経済活動がそこに組み込まれる相互依存の体系である。したがって局地経済を活動の諸層の結合の歴史的産物としてみる事ができれば、これらの諸層が今度は国内的・国際的空間構造内で局地経済が果たす役割の遷移 (succession) を表すことになる。

それぞれの新しい層、新しい投資は社会組織の新しい経済的土台、新しい『構造的能力』(structural capacity)、より広い地理的分業内での新しい全体的地位をもたらす。前節³⁾では異なった空間構造には異なった内的に必然的な含意があることをみた。しかしある状況下で空間構造の及ぼす影響はそのような論理からのみ予測されうるものではない。真の含意は新しい投資ラウンドの性格だけでなく、影響を受ける地域の過去の性格にもよる。諸層の結合は地域・地域システムの過去の諸性格(地理的パターンの過去の性格と過去の利用の結果をともなう)の相互決定の形態である。…発生する変化の種類は明らかに入ってくる産業の種類(その産業がその地域において全体の空間構造に合体されるあり方)とその地域の過去の産業構造による。…新しい空間的分業への局地地域の編入は経済的にも社会的にも変化と崩壊をもたらす。」(同上、pp.117-119)

このあと、マッシーは、イギリスの労働運動の事例などをあげたあと、次のようにいう。「局地地域が新しい分業体系に組み込まれることから帰結する崩壊の結果、および変化の形態と方向はそれ自体すでに長く複合的な歴史の結果である地域のそれまでの性質による。局地的な変化と性質はより広い過程の単なる『反映』ではない。局地地域はより高次の国家的・国際的レベルから伝えられた変化の単なる受け手ではない。局地レベルにすでに存在する多様な条件もこの過程の作用自体に影響を与える。」(同上、p.119) このあと、マッシーは、問題はこれだけではないとして、経済以外のイデオロギー的・政治的側面を重視するが、マッシーのローカリティ論の論理的枠組み、つまり構造主義的アプローチとローカリティ論との接合図式の基本は最後の二つの引用文である。ただし、前段が構造主義的アプローチ、後段がローカ

リティ論である。

後段のローカリティ論は、明らかに、経済地理学に古くから継承される新カント派の個性記述的 (idiographisch) な立場である。新カント派は「ドイツに19世紀後半、自然科学の発展とマルクス主義哲学の台頭に刺激されてあらわれ」⁴⁾た哲学学派で、特にヴィンデルバント、リッケルトのバーデン派あるいは西南ドイツ学派は「自然科学と社会科学(文化科学)との方法論的特徴を説いて、社会科学における法則の存在を否定した」(注4, p. 229)。つまり、新カント派によれば、自然科学は法則定立的 (nomothetisch)、社会科学(文化科学)は個性記述的である。この立場は、地理学において、ヘットナー⁵⁾、ハートション⁶⁾によってうけつがれ、シェーファーによって「地理学における例外主義」⁷⁾と批判された。本論にかえれば、マッシーは、ローカリティ=過去の空間的分業の性質を所与とみなし、法則の存在を認めないものである。われわれは、構造主義を支持するものでも新カント派を支持するものでもない。しかしわれわれには前段の構造主義的アプローチから後段のローカリティ論への論理が理解できない。過去の空間的分業は過去の「立地法則」によって「合法的」に規定されるのではないか。マッシーは、「新しい投資ラウンドの性格」・「入ってくる産業の種類」については類型学にせよ一定の法則性を認めるにもかかわらず、「地域の過去の性格」・「過去の産業構造」についてはこれを認めない。つまり、マッシーは現在の空間的分業については一定の法則性を認めるにもかかわらず、過去の空間的分業についてはこれを認めないのである。「新しい投資ラウンドの性格」・「入ってくる産業の種類」が「より広い過程の単なる『反映』で」あり、「より高次の国家的・国際的レベルから伝えられた変化の単なる受け手で」あるなら、「地域の過去の性格」・「過去の産業構造」も「より広い過程の単なる『反映』で」あり「より高次の国家的・国際的レベルから伝えられた変化の単なる受け手で」ある。

以上、本節では構造主義的アプローチとローカリティ論(新カント派の個性記述的な立場)の不整合性を検討した。

1) Massey, D. & Allen, J. (eds.), *Geography Matters !*, Cambridge Univer-

sity Press, 1985.

- 2) 技術革新の各段階と考えてよい。
- 3) 前節では多工場型企業空間構造類型学と社会構造の関係を論じている。
- 4) 『哲学辞典 [第4版]』青木書店, 1985年, p. 229.
- 5) Hettner, A., *Die Geographie, ihre Geschichite, ihr Wesen, und ihre Methoden*, Ferdinand Hirt, 1927. 磯崎優・森田優「ヘットナー (1927): 地理学, その歴史, 本質および方法 (第I編 地理学史) (邦訳)」『地理学報』(大阪教育大学地理学教室) No. 26, 1988年, pp. 17-112. 同「ヘットナー (1927): 地理学, その歴史, 本質および方法 (第II編 地理学の本質と課題, 第III編 地理学的研究) (邦訳)」『地理学報』(大阪教育大学地理学教室) No. 27, 1989年, pp. 81-156. 同「ヘットナー (1927): 地理学, その歴史, 本質および方法 (第IV編 地理学的概念および思想の構成) (邦訳)」『地理学報』(大阪教育大学地理学教室) No. 28, 1992年, pp. 203-284.
- 6) Richard Hartshorne, *The Nature of Geography: A Critical Survey of Current Thought in the Light of the Past*, The Association of American Geographers, 1946. リチャード・ハーツホーン, 野村昭七訳『地理学方法論——地理学の性格』朝倉書店, 1957年.
- 7) Schaefer, F. K. "Exceptionalism in Geography: A Methodological Examination" *Annals of the Association of American Geographers*, Vol. 43, 1953, pp. 226-249. シェーファー, F. K., 「地理学における例外主義: その方法論的吟味」, 野間三郎訳編『空間の理論——地理科学のフロンティア』古今書院, 1976年, pp. 14-47.

むすび

以上, 三点にわたって構造主義的マルクス主義経済地理学の方法と問題点を検討してきた。

マッシーの新古典派産業立地論批判についていえば, マッシーの見解はほぼ妥当な見解だと私は考える。しかしその後, マッシーが構造主義的アプローチにふみだして以後, 破綻が生じたのである。つまり, 構造主義的アプローチは類型学=静態的であり, しかも構造主義的アプローチとローカリティ論(新カント派の個性記述的な立場)との接合は不自然である。ただしわれ

われの批判は多くのマッシー批判とは異なる。多くのマッシー批判は、N. スミスに代表されるように、構造主義的アプローチをローカリティ論と直接結びつけ、構造主義的マルクス主義経済地理学が理論の放棄・新たな経験論の承認であるとする。これに対して、われわれは、構造主義的アプローチが類型学であることは認めるが、これを静態的と批判し、構造主義的アプローチとローカリティ論の不整合性をつくのである。したがって、われわれは、二重の批判をおこなっている。つまり、構造主義的アプローチが単に静態的であるだけでなく、構造主義的アプローチに内在してもなお生じる問題があるわけである。

以上が本稿の論点のまとめである。したがって、われわれは、マッシーによる新古典派産業立地論批判を継承しつつ、反構造主義的な、つまり歴史科学としてのマルクス主義経済地理学の形成を模索しなければならない。このためには経済地理学の動態的性格と都市形成・地域形成の問題を資本のダイナミックスの問題としてとくことがまず必要になる。

(一橋大学大学院博士課程)